

北生駒地域におけるフクロウの繁殖調査 ～鳴き声による個体識別の活用

谷川智一

大阪府と奈良県の県境北部に位置する生駒山系の北部地域において、2004年からフクロウ *Strix uralensis* の営巣を目的とした巣箱を設置した。2007年から巣箱の利用状況や産卵数・巣立ち数等を記録し、2018年までの12シーズンで（自然巣を含め）32カ所の巣で236羽の雛が巣立ち、そのうち213羽に標識を施した。また、四條畷市の巣箱1巣については、2009年から巣箱内にビデオカメラを設置して、概ね1～6月の半年間の録画調査を行い、詳細な繁殖ステージの推移と、餌内容の確認を行った。

巣の様子を録画した四條畷市の巣箱では、繁殖に成功した2009年と2011年、2012年に、産卵前から巣立ちまで、継続的に録画することができた。これらの画像から餌の種類と回数を記録したところ、年ごとに餌組成が大きく異なった。北生駒全域の繁殖成績がよかった2009年は、録画した巣でもネズミ類が顕著に多く繁殖の時期も早かった。また、繁殖成績が悪かった2011年には、繁殖の開始時期が遅く、給餌内容も両棲爬虫類や昆虫類、ムカデが多かった（日本鳥学会2015年度大会でポスター発表）。

2010年からは、フクロウの繁殖期である2～4月に各巣箱付近にICレコーダーを設置して夜間の録音を行い、フクロウの巣箱訪問の有無や繁殖ステージ（抱卵しているか、孵化しているか等）の確認を行っている。

フクロウのオスの声（hootcall）には個体差がある。声は前節2音+後節5音の2節7音で構成され、その声質、声量、スピード、間隔、抑揚等を意識して注意深く聞くと、個体の特徴を掴める場合が多い。その特徴はスペクトログラムにより可視化することもできる。各巣で繁殖活動を行っていたオスの声を抽出してその巣の前年までの声と比較すると、同一オスが継続しているのか、あるいは別のオスに入れ替わっているのか、推測することができる。

2018年までに30カ所の巣で145例のオスの声を録音した。それぞれの巣ごとに前年までの声と聞き比べ、個体の入れ替わりがあったかどうかを確かめたところ、入れ替わりのあった巣となかった巣では、繁殖の成功率に違いがあるように見受けられた。複数年にわたり繁殖成功が続く巣では同一オスが継続していることが多く、別のオスに入れ替わった年に繁殖失敗する例が多いようである。本件については2015年に日本鳥学会員近畿地区懇談会（大阪市立大学）で経過発表しているが、今回はその後の3シーズンの結果を加えて考察する。